

**<寄稿要項>竹内好『魯迅』を読んで(読書・映画・音楽)**

著者	渡辺 桐子
雑誌名	日本文学誌要
巻	54
ページ	119-119
発行年	1996-07-13
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019911">http://hdl.handle.net/10114/00019911</a>

竹内好

## 『鲁迅』を読んで

渡辺 桐子

鲁迅の作品は凄い。長編は一遍も無く、短編だけを残した作家であるが、長編でも語りえないものを、その短い紙面に溢れさせ、国の違いも時代の変化も政治体制の変遷も、まるで感知しない世界に生きているかのように他国人に不自由を感じさせない。だが、一歩下がって理解しようとする、これが見えない絶壁の様で、どこから手をつけてよいかも分からない。作品を読み終えた時に、明らかに感じていた想いが、一瞬にして砂礫と化したように、読者を独り放り出したまま、作者はどこかへと行ってしまふ。

今迄内外、色々な作家の作品を読んできたが、これ程迷ったのは初めてであった。だから、竹内氏の『鲁迅』に頼ったわけだが、『魯

迅』もまた難しく、鋭く、他の追隨を許さないとはこういうもののかな、と思いつつ、『鲁迅』の中に出てくる作品を読みつつ、連休を過ごした。

「私はただ一つの影だ。……だが私は明暗の中を彷徨したくない。私は暗闇の中に沈みたい。」(影の告別)

「私は、自分がどんな方法で乞食するかを考えていた。……」

他に何人かの人々が、めいめいに道を歩いていた。……

私は布施を得られず、布施心を得られぬだろう。……

私は、少なくとも虚無を得るだろう。」(乞食者)

鲁迅自身は長編を書いていない事について「私に偉大な才能が無いために」書いていないといい、竹内氏も「事実、書けなかったのである。そして同時に、その書けぬことに彼が忠実であった」と言っている。

竹内氏は「鲁迅の見たものは暗黒である。だが、彼は、満腔の熱情をもって暗黒を見た。そして絶望した。絶望だけが、彼にとって真

実であった。」「絶望に絶望した人は、文学者になるより仕方ない。」という。文学によって啓蒙したいというのではなく、絶望を背負ったまま書いたものが啓蒙的であるというのだろうか。

氏はまた言う。「鲁迅が、近代中国の最大の啓蒙者であるということは、衆評が一致している。……近代中国が、それ自体の伝統のなかから自己改革を行なうためには、鲁迅という否定的媒介者を経ることを避けることはできなかった。」と。

啓蒙は古来、文学によって行なわれてきた。鲁迅の作品を「小説」としてのみ理解しようとしてはいけないという事は、それが「啓蒙的小説」であるからであって、作品の書かれた歴史的状况と、彼の生涯を抜きにしては鲁迅の小説は語れないのだ。ドフトエフスキーなどにやや似ている気もするが、鲁迅の場合は全てが短編であるという特色も忘れてはいけない。

虚無感と寂寞と、孤独を、鲁迅の作品は常にたたえている。その底知れぬ怖さを感じると、竹内氏のように、一生鲁迅を探究して行きたいなどと、思ってしまう。

(3年E組)